機関士から磁器会社へ転身

株式会社おぎそ会長の小木曽順務さん

外航船の機関士から磁器メーカーの経営者に転身した人がいる。元明治海運一等機関士で現在は株式会社おぎそ（本社・岐阜県土岐市）会長の小木曽順務さん（65）。小木曽さんは破損した食器をリサイクルして高強度磁器食器を開発した。東京ビッグサイトで2月17日～20日まで開催された第43回国際ホテル・レストランショーに出展中の小木曽さんを訪ねた。

元明治海運の一機士

船の世界に食器で還元したい

出展ブースに立つ小木曽さん

2月19日、東京ビッグサイトの展示会場を訪ねると、株式会社おぎそのブースに小木曽順務さんの姿があった。今回の展示会では、ホテルやレストラン向けに、同社のリサイクル高強度磁器食器「Re-OGISO」を出展しPRしている。この食器は一般の陶磁器に比べて約4倍の強度をもち、その割れにくさは業界一。繊細で美しいデザインながらタフなことが売りだ。さらに破損食器を回収して18%配合したリサイクル食器として、エコマークの認定を受けており、地球にやさしい丈夫な食器として、保育・学校給食や病院・福祉施設の食器として幅広く採用されている。

「日本は資源に乏しい国。大切に資源をいかして繰り返し使うという、船で学んだことが今の私の事業の根幹にあります」と小木曽さんは語る。

寺から海をめざして

小木曽順務さんは昭和25年10月生まれ。愛知県西尾市の真宗大谷派（東本願寺）浄徳寺の5男として誕生した。

「寺から海を志したきっかけ？私の兄は当時大学院に通っていたが、私は早く外の世界を見てみたかった。どうせなら船に乗って世界をみてやろうと思い、鳥羽商船高専に進学しました」と小木曽さんは語る。乗船実習では世界一周航海も体験。当時新造船だった「青雲丸」で88日間の航海に出た。

昭和26年、明治海運に入社。機関士としてタンカー、鉱石船、チップ船などに乗船した。乗船して痛感したのは「日本は本当に小さくて資源がない国だということ」と小木曽さんは語る。「井の中の蛙になってはいけない、と思いました」

当時乗船していたタービン船では、高圧・高温の蒸気が漏れる機関故障を先輩とともに修理したことが記憶に残る。「怖いなんてもんじゃない。命がけですよ。それでもみな黙々と修理して、直った時は本当にうれしかった」と小木曽さん。物を大切に使い、壊れれば自分たちで直してまた使う。船では当たり前のこうした経験を繰り返すうちに「限りある資源を大切に生かす」ということが体の中に叩き込まれたと小木曽さんはいう。

昭和52年、7年間務めた会社を一等機関士で退社し、陸に上がった。陶磁器の卸業を営む小木曽商店（現・おぎそ）に入社し、59年には代表取締役に就任。全国北海道から九州・沖縄まで、商品を持って営業に回わり、事業の拡大を図った。

学校給食は生きた教育の場

そんな中で多くの人との出会いがあったが、転機となったのは名古屋市大森小学校校長の旗山明氏との出会いだと小木曽さんは語る。旗山校長から食育の大切さを教わった小木曽さん。当時学校給食で使用されていた食器は樹脂製のものが多く、有毒物質のビスフェノールが発生する危険が指摘されていた。

「学校給食は生きた教育の場であり、丈夫な磁器食器こそ、生きた教育資材として活用しなければならない」という旗山校長の思いが「おぎそブランド」の高強度磁器食器の採用となり、小木曽さんは旗山校長の言葉に啓発を受け、本格的に環境学を学び始めた。

その後、同校には給食の残飯を堆肥化するリサイクル装置を設置し、さらに破損した食器をリサイクルして新しい食器に生まれ変わらせるエコ食器を開発。給食用高強度磁器食器でエコマーク認定を受けた。いまでは全国の学校、保育園で採用され、東京都でも17区で使われている。そのほか病院や福祉施設、ホテル・レストランでも採用されている。高強度によって壊れにくいことがまずエコにつながる。

現在は3人の息子に会社の実務を任せ、小木曽さんは全国で講演活動を行いながら商品のPRに努める。

最近は船員仲間から声がかかるようになった。リサイクル食器の取り組みがテレビで取り上げられると同級生が電話をくれる。商船学校の先輩から講演の依頼が来る。「本当にうれしいことです。私は7年間しか船に乗っていなかったが、いまだに商船学校、船員時代の先輩・後輩、同期生が仲間として迎え入れてくれる。海の仲間の温かさを感じます」と小木曽さんは目を細める。

だからこそ、現在の自分の仕事を海の世界に還元したいという思いが強い。「高強度磁器食器こそ揺れる船内でも安心して使ってもらえる」と小木曽さんは胸を張る。

「軽くて壊れにくい食器は司厨部の負担も軽減し、磁器の美しさが船内生活に彩りを与えてくれる。船で資源の大切さを学んだことと人とのつながりが今の仕事を支えてくれています。それを船に返すことができれば最高ですね」と小木曽さん。いま、使用済みペットボトルを資源活用した食器も考案中。人にも地球にもやさしい食器がまた誕生しそうだ。

商品の説明を行う小木曽さん

倒れてもこぼれないふたを付けた湯のみ。展示会で知り合ったメーカーとのコラボ商品だ

船で学んだ限りある資源を大切に活用すること

編集ノート

名匠というと読者の皆様には誰が思い浮かぶだろう。小津安二郎の名は挙がるだろうか。「東京物語」などで知られる映画監督。山田洋次監督が小津へのオマージュ（敬意）として一昨年、同作をリメイク（「東京家族」）したことでも話題に▼「東京物語」では折々の場面で海が静かにさりげなく使われている。老父周吉の故郷、尾道の海。そして周吉夫婦が体よく東京に住む子供の家から追われるくだりでの熱海の海。「東京家族」では尾道が大崎上島に、熱海が横浜に置き換わっているけれども、そこも背景は海だ。小津がこういう言葉を遺しているという。「どうでもいいことは流行に従う。大事なことは良心に従う。芸術のことは自分に従う」▼小津作品にも登場する佐田啓二。名優のオマージュはこれからという37歳で早世。子息中井貴一さんが跡を継いだ。中井さんは父の死の年齢で自分も死ぬと思っていたという。テレビのインタビューで語っていた。夢とは何かを実現することではなく、死に向かう人生をいかに充実させるかのことだと思う―。名匠の遺風を受けて育った平成の名優の言葉もまた含蓄がある。

海に関係する仕事ってどんな仕事があるんだろう？

そんなときは
ここにアクセス！

海の仕事.com（うみしごとドットコム）

船乗りや造船所で働く人、海を守る海上保安官などの仕事を写真や図表で分かりやすく紹介。全国で開催される海に関するイベントも！！

海の仕事の魅力満載！ 海の仕事.com

http://www.uminoshigoto.com